

初

音

令和四年 九号

それぞれ個性を伸ばし、とても豊かな作品集となりました。
次の号も皆様と共に心待ちに致します。

(順記)

句会

日時 毎月第四月曜日 午後一時三〇分

場所 鷺が丘 自治会館

文化祭

小田嶋順子

入試会場みな影を先立たせ

急ぐ人のなき梅林のまるき径

春先のあふれていたりせりの台

花吹雪浮かぶるものなき海に出て

余り苗一握りほど育ちたる

一枚の青田に鷺の一羽づつ

雲よりも白き灯台稲光

上流も下流も花火あがりけり

皆既月食木犀の香りけり

調弦の音のはじまる文化祭

鳥帰る

越後 良子

初詣呼び声静か出店かな

鯉跳ねて鳴き声遠く鳥帰る

余震かとまた夢遠く春を待つ

酒薫る酒蔵通り桜舞い

ジャンゲルジム花くず顔にパズル解く

紫陽花の幸福次へブーケトス

青空に雲ひとつも無き星の月

秋高し歩け歩けと里山に

洛北の紅葉と天狗共演す

赤き実の個々に輝く年の暮れ

肩車

岡田久美子

予報士の声はずむ一番桜

今朝よりも桜ほころぶ戻り道

老いてなお身綺麗に更衣

火祭りや子供神輿が堰を切る

肩車父子揃いの浴衣かな

頬杖で進まぬ句作夜長かな

冬花壇名札残して堪えにけり

農具家に暖簾のやうなひね大根

雪虫や晴間に群れて遊びいる

なまはげの舞い手白い手空を切る

冬ランチ

河村芳子

十年を語り尽くして冬ランチ

お裾分け門扉に白菜留守の嫁

塀越しのかたし蕾ぞ春まちぬ

目が笑うマスク美人と食事会

秋に入る赤ちゃんのほほ押してみる

驚きのジャガール梅雨の美術館

白藤や夕日に染むる山近し

喰積を入籍の日にもたせけり

障子はる子犬が蹴った穴一つ

語らいは十葉みつる木陰かな

紀伊美恵子

柏餅竈で蒸した母想う

青草に紅の芍薬輝けぬ

小さき箱開けてテーブルびわ色に

壁をはう火の鳥のごと薦紅葉

母が好みし千両の今赤し

秋の空鷲の飛ぶさま雲に見る

晩秋の色となりけり五月山

陽をあびて母の名残の秋明菊

秋深し子猫元気に走りけり

ほのぼのと柿の実の色ずきぬ